

崔書勉先生と私

駐福岡大韓民国総領事 金玉彩(キム・オクチェ)

私が崔書勉先生に初めてお会いしたのは、一九九九年、二度目の駐日韓国大使館勤務からだと思えます。寺田佳子様が経営されていた六本木のフレンチレストランで日韓談話室のメンバーと初めて挨拶を交わした記憶が鮮明に残っております。勿論、以前本国で日本デスクを担当していた頃から崔先生のご芳名は何つており、先輩から日韓談話室の会合にオブザーバーとしての参加のお誘いを頂いた時は喜んで承諾しました。以来、一等書記官、参事官、公使など肩書きが変わっていき、二〇一六年秋、東京を離れるまで東京滞在十一年間、出来る限り談話室の会合に参加しようと努めました。そのお陰で、崔先生の卒寿祝いにも参加することができました。私は談話室の会合を通じて書物で断片的に辿ってきた韓日の秘史を崔先生の克明な証言によって肌で感じ取ることが出来ました。それ以前は、主に八〇年代以降の韓日関係だけに絞られていた私の知識が二〇年を繰り上げ六〇年代まで遡ることができ、理解の深さと幅を広げることが出来ました。現在、私が有する日本に対しての認識は崔先生の教えから多大な影響を受けたものだと思います。

談話室に参加して私は主に崔先生を始め皆様の発言を聞き入る立場だったものの、時には発言を求められる場面もありました。韓日関係は常に山あり谷ありでしたが、二〇一二年以来冷え込んでいた韓日関係に対して今は亡き寺田様から「日本が今まで何回も反省し謝罪したにもかかわらず、韓国は何故今も謝罪を求めるのか？」と質問を受けたときは胸が痛む思いでした。その後、寺田様が他界され、大使館の代表として葬儀に参列した時、「果たして彼女の問いに対する私の回答に彼女は納得したのだろうか？」と自問自答しながら御霊前にご冥福を祈りました。

私は、去年十一月に第十七代駐福岡大韓民国総領事として赴任し「先人の知恵から学ぼう、韓日の真の和解と友好は九州から」とのスローガンを掲げ、公務を務めています。近・現代史においては韓日両国の認識の相違から論争を繰り返しても結論を出すのは難しいと東京での十四年間の経験で痛感したからです。

新羅が韓半島を統一する以前まで古代韓半島の国家だった伽倻と百済、日本の大和朝廷は兄弟国家以上の関係だった事実

が数多くの歴史の記録、遺跡として九州、畿内の各地域に残っています。国境もビザもなく、民族と言語、文化を自由に交流した輝かしい古代韓日関係にもう一度、蘇らせることは出来るでしょうか？

終わりに、談話室会員皆様の益々のご健勝を祈念申し上げるとともに、今後とも御指導御ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



